

種文学賞 令和五年第一回目 作品集 上卷

令和五年第一回目の種文学賞は、

・小学三年生の部「〇〇前のわたし」

・小学四年～五年生の部「地の文をつくらう」 Level.1

・小学六年～中学一年生の部「地の文をつくらう」 Level.2

・中学二年～三年生の部「地の文をつくらう」 Level.3

というお題で作品をつくり、最終的に全十五人による力作がそろいました。

この上巻では、小学三年生の部、小学四年～五年生の部、小学六年～中学一年生の部の作品を発表します。

目次

小学三年生の部
…… 三ページ

小学四年生～五年生の部
…… 五ページ

小学六年～中学一年生の部
…… 九ページ

◆ ◆ 小学三年生の部 ◆ ◆

この部では、過去の自分に手紙を書くというお題でみなさんに文章を書いてもらいました。どの作品も個性がかがやいていて読みごたえがあります。ぜひ楽しんでください。

※個人情報がかかります。ぜひ楽しんでください。

筆者 おっくーたぬき(小三)

一年前の自分、おげんきですか。今君は、学校のじゅぎょうがおわって二十分休みに入ったでしょう。その後トイレに行きたくなってトイレに行くでしょう。その後同級生の【君が、トイレに入ります。そのとき、その子が女子トイレに入ったか、男子トイレに入ったかくべつがつかないと思います。君が、】 【君が女子トイレに入った。】と

さげんでしまうでしょう。それを聞いた友達のごんだんが君がうそをついたと思って先生に言いに行くでしょう。すると先生におべんとうの時間におこられてしまいます。だから、【君が女子トイレに入った。】とさげばないように一年前の君は、気をつけてください。みらいのぼくは今【君が女子トイレに入った。】とさげんでしまったことをこうかいています。【君とはもうなかよくなっています。君はぼくよりも友達を作ってください。さようなら。】

筆者 空(小三)

二年前の【君、お元気ですか。ぼくは、二年後の君です。いま君

は、昼休みをすごしています。たいへんだったと思います。君は、鬼ぶっこをしていたら高学年にぶつかってしまいましたね。なぜぶつかったかは、よそみをしていたからです。ぶつかったあとは、「ごめんなさい」と言ったけれど、心配になって、次の日には外にでたくないと思ってしまう。だから、よそみをせずに前をむいてください。そうすると、もう人には、ぶつからないよ。ぼくは、このときぶつかったから、人にはきをつけています。だから人には、いまのところぶつかっていません。二年前のぼく、がんばってね。さよなら。

筆者 マリオ(小三)

きのうのぼくへ。こんにちは。ちょうしはどうですか。【小学校の北にある目の前のビルにのぼったのは楽しかったですか。

一時間目の社会のじゅぎょうでぼくのすんでいる【町ではない校区のけしきを見てみようという勉強をしました。それでビルのおく上へのぼっていましたね。

ビルのおく上まで行って君はこわかったかもしれませぬね。それに一時間目に出てちょっとねむたくて絵をきれいに描けなかったかもしれないけれどきみはすごくがんばっていたと思います。ビルのおく上に行ったらけしがきれいでしたね。かぶと山もこまかいところを見られて地図にかけてよかったです。ビルではたらいっている人だけけしのぼれないところを上げてよかったですね。それでは、さようなら。

筆者 Z(小三)

一年前の【君、お元気ですか。ぼくは一年後の君です。少し前

君は「二年生の先生はだれかな」と心の中で思っていたと思います。

君は「【先生かな」とよそうしていたでしょう。その後、何日か

たちクラスがはっぴようされました。君は二年三組になると思います。

「【先生はやさしくてたくましい先生だな」と心の中で思っているでしょう。

ぼくが「たんにんの先生は【先生かな】と思った理由はぼくの

お兄ちゃんが2年間【先生が2、3年生の先生をしていたから

です。クラス発表された後、ぼくは「3年生の先生も【先生がい

いな」と思っていました。ですがげんざい【先生はいんたいして

ます。いんたいするという話を聞いたときぼくはがっかりしました。

ですがよかったなと思ったことはいんたいする前に【先生と一年
間いっしょにすごせたことです。

一年前の【くん、【先生といっしょに楽しい一年間にして

ください。

◆◇ 小学四〜五年生の部 ◇◆

この部のお題は「地の文をつくらう Level.1」。二人の人物の会

話だけをみて、それがどのような物語の一場面かを自由に想像し、

そこに地の文(ナレーションの文)をつけるというものです。

どのような物語を考えたのが分かるように、その場面までのあ

らすじを百字以内で書くという課題もありました。みなさんが作っ

たその本文とあらすじの両方をご紹介します。

まずは、今回この部のみなさんが取り組んだ会話を見た上で、それぞれの作品をご覧ください。

〈今回の会話文〉

「おかあさん」

「あらあら、どうしたの？ こんなにどろだらけになっちゃって。」

「ほらみて、きれいなものみつけた！」

「あらほんとにすてきね。宝箱にしまってくるの？」

「うん！」

「そう。でも、へやに入るまえに、まずは手と足をあらってきてちょうだいね。」

作者 海（小五）

〈これまでのあらすじ〉

たさという宝さがしが好きな子がいて、毎日宝さがしをしてきた。今日も近くの公園へ宝さがしに出かけていた。なかなか出てこず、あきらめようとしていた時、しんじゅがでてきた。そして、走って家へもどった。

家へもどるとおかあさんは、お仕事をしていた。オンライン買い取りの責任者をしている。

「おかあさん」

「あらあら、どうしたの？ こんなにどろだらけになっちゃって。」

「ほらみて、きれいなものみつけた！」

とたさは、うれしそうにさっき見つけたしんじゆを見せた。

「あらほんとにすてきね。宝箱にしまってくるのっ。」

「うん！」

宝箱というのは、去年きょねんの6月宝さがしの時に見つけた箱でピンク色のラメがついている木の箱だ。

「そう。でも、へやに入るまえに、まずは手と足をあらってきてちょうだいね。」

とお母さんは、まゆをつり上げながら、こしに手をあていった。

たさは、急いそいで手と足をあらいできた時にはまだせっけんがついていたが、そのまま服べいをきて、宝箱たからばこにそと置おいた。

たさは、しんじゆの入った箱を見てこれまでにない発見はっけんだなと心の
中で思った。

作者 たこやきタコス(小四)

〈これまでのあらすじ〉

家の近くの海へ犬のさん歩にいったとき、犬が波なみにおどろいていきなり走りだし、ソフィアは転ころんだ。犬がかがやいているきれいな貝かいがらをくわえてもってきてあまりにもきれいだったので家にもって帰ることにした。

「おかあさーん」

とつぜんボタンという音がした。お母さんは急いそいでげんかんにいった。

「あらあら、どうしたの？ こんなにどろだらけになっちゃって。」

ソフィアの全ぜんしんがどろだらけになっていた。それをみてお母さんが

口を^オの字にあけた。

「ほらみて、きれいなものみつけた！」

ソフィアはうれしそうにいつて手をさし出した。

「あらほんとにすてきね。宝箱にしまってるの？」

「うん！」

ソフィアは、大事に^{だいじ}ポケットにしまった。

「そう。でも、へやに入るまえに、まずは手と足をあらってきてちょう

だいね。」

とお母さんはにこにこしていった。

作者 ランボルギーニ(小五)

へこれまでのあらずじ

母がごはんを作り終わるまでけんとは公園に行った。けんとは砂場^{すなば}に行き穴^{あな}をほり続けると美しい貝^{うつく}がらが六つ見つかった。早くその貝がらをお母さんに見せたいので走って帰った。

ぼくは

「おかあさーん」

ととてもニコニコしながら大きな声で言った。そしてお母さんは「あらあら、どうしたの？ こんなにとろだらけになっちゃって。」

と笑顔^{えがお}でいった。ぼくはお母さんの笑顔を見ると元気がでた。そしてはやく貝がらを見せたいので貝がらを入れていたポケットに手を入

れると穴あながあいていて六こから一こに減っていた。ふしぎに思った。けれどお母さんのさっきの笑顔えがよを思い出すとどうでもよくなった。そしてぼくは

「ほらみて、きれいなものみつけた!」

と言いいながら残のこっていた貝いがらを見せた。するとお母さんは

「あらほんとにすてきね。宝箱たからばこにしまってくるの?」

とびっくりした顔かおでいった。

「うん!」

ぼくはその貝いがらは砂すながついているので洗わってふいてドライで買った金色きんいろの宝箱たからばこにしまおうとした。その時お母さんはぼくがとてもよよれていることに気きづき

「そう。でも、へやに入るまえに、まずは手と足をあらってきてちょう

だいね。」

とぼくにたのんだ。ぼくは手と足をお風呂ふろで洗い貝いがらをしまった。その後リビングに行くとおハンバークハンバークがおいてあった。お父さんが帰かえってきて家族かぞでハンバークハンバークを食べた。

◆◇ 小学六〜中学一年生の部 ◆◇

この部のお題だいは「地じの文ぶんをつくらう Level:2」。基本きほん的には小学

四〜五年生の部ぶと同じ課題かだいですが、

・与あたえられた会話文かいわぶんの前後ぜんごすべてに地じの文ぶんを入れること、

・登場人物とうじょうぶつ以外いがいのことことがら(情景じやうけい・物ものなど)にふれた地じの文ぶんをかな

らず一しよか所ところつくること

という二つの条件じやうけんを設もうけていました。

ではこちらも、今回この部のみなさんが取り組んだ元の会話を
見た上で、作品をご覧ください。

〈今回の会話文〉

「こんなところにいたのか。さあ、もどろう。」

「…」

「どうしたんだ。早くもどらないと。みんな心配してる。」

「もどりたくない。」

「どうしてっ？」

「…」

「だまっていたらわからないじゃないか。さあ、立って。早く。」

作者 いち(小六)

〈これまでのあらすじ〉

一年生の時いじめられながら登校した守君はぼくと仲がよ
かった。新学期から学校になかったので、先生は守君の母に
電話したら学校に行っているとされた。先生はひっしにさ
がした。ぼくは、先生について行った。

先生は必死でさがしたらしい。夏だからよけいあせをかいていた。
守君を見つけると、安心してかたを下ろした。そして息を整えて
深呼吸してから、

「こんなところにいたのか。さあ、もどろう。」

と言った。夏の昼は暑くてせみがうるさく鳴いている。先生の声はせみの声に負けて守君には聞こえなかった。

「…」

なにか言った先生は守君がむししたとと思っているみたいだ。だからこんどは、少しいらだちながら

「どうしたんだ。早くもどらないと。みんな心配してる。」

と言った。ちよときつい口調だからせみの声に勝った。

守君はまた学校にもどってもいじめにあうし、うれしいことがないのだろう。だから守君はそっぽを向いて、

「もどりたくない。」

と言った。これは守君のいつもどおりの大きな声だったからせみの声に勝った。やっと返事をしてくれてほっとした先生はもうあと一足で

守君を学校につれていけると思ったのだろう。そしてやさしく

「どうして?」

と言った。学習しない先生だ。最初だってやさしく言ってせみの声に負けた。今回もやさしく言いすぎてまたせみの声に負けた。もちろん守君には聞こえない。

「…」

先生は守君がなぜ返事をしないのか考えた。けれど理由がみつからないようだ。もう先生は言葉を通してじよじよにせっとくしようとするのをやめたようだ。強せいに学校に連れもどす作戦に出た。

「だまつていたらわからないじゃないか。さあ、立って。早く。」

と言った。ふつうの声で言ったから、せみの声に勝った。しょうがなくなった守君は先生の指示通りに立った。そして三人で学校にもどった。

作者 オセロ(小六)

〈これまでのあらすじ〉

五・六年生たちがお楽しみ会をしていた。次のゲームをやるというときに、なぜか五年生のかなたが急いでどこかに行ってしまった。そして、六年生のたつやがかなたを追っていった。

かなたはいつもの体育倉庫のうらにいた。

「こんなところにいたのか。さあ、もどろう。」

しかし、かなたに動く気配はない。

「……」

ぼくは時計に目をやった。早くみんなの所へ行つて、お楽しみ会の続きの遊びをしたい。

「どうしたんだ。早くもどらないと。みんな心配してる。」

「いつい早口になって、ぼくはそう言った。」

「もどりたくない。」

みんなが心配しているというのに、もどらないということに、なぜか

怒りという感情より悲しいという感情が強くなった。

「ど、どうしてっ。」

これはぼくの悲しいという感情に対するき問でもあり、かなたのも

どりたくないということに対してのき問でもあった。

「……」

ぼくの感情までもがこの質問には答えられなかった。

「だまっていたらわからないじゃないか。さあ、立って。早く。」

ぼくはあなたの手を引っぱってお楽しみ会をやっている教室にもどった。まどをのぞくと、空はだんだん晴れてきている気がした。

作者 さと(中一)

〈これまでのあらすじ〉

居間で次男雄太と三男浩太が遊んでいる時、雄太は花瓶を割ってしまった。雄太は母に浩太が割ったとうそをつき、浩太はそれを否定したが母に認めてもらえず浩太は家を出てしまい、長男恵太が探しにいった。

恵太は家から十五分して着く公園に浩太がいるのを見つけた。

「こんなところにいたのか。さあ、もどろう。」

と恵太はため息をついて言った。

「...」

恵太の話しかけに応じず、浩太はうつむいたまま何も言わなかった。

「どうしたんだ。早くもどらないと。みんな心配してる。」

と恵太は不思議そうな顔で言った。

「もどりたくない。」

浩太は涙のたまった目で恵太をにらむようにして言った。その声は

恵太をつき離すような声だった。

「どうして?」

恵太は涙目になっている浩太にやさしく聞いた。

「...」

公園は冷たい風が吹いていた。浩太は凍えて鼻水が出ていたが何も

言わなかった。

「だまっていたらわからないじゃないか。さあ、立って。早く。」

浩太が何も言わなかったので恵太は少し怒った口調で言い、その後浩太を無理やりに引張って帰った。浩太は泣きながら足を引きずるように歩いた。

作者 マツタケ(中一)

〈これまでのあらすじ〉

和真かずまはかなり太っている小学二年生で前回りまえまわが怖こわくてできない。体育たいいくの鉄棒てつぼうの授業中じゆぎょう、いじめ好きずの健太けんたにそのことからかわれた和真は学校から脱走だつそうし公園の木のかげにかくれていたが先生に見つかってしまった。

先生は安心あんしんしたように笑顔えがおを作りながら話しかけてきた。

「こんなところにいたのか。さあ、もどろう。」

町の中をさうとう探して見つけたのだろう。先生の顔の汗あせは太陽のように光りかがやいていた。だけど、今は誰だれとも口をききたくない。

「…」

先生は心配しんぱいしたのかぼくの近くに座すわった。木の影かげはぼく一人分のスペースしかなく、先生は日なたに腰こしかけていた。

「どうしたんだ。早くもどらないと。みんな心配してる。」

だけど僕は戻かへりたくなかった。この公園には遊具ゆぐはなく木が一本生えているだけであり、木の影いがい以外みあ影は見当たらなかった。だけど僕は一人影ちがにいる。みんなとは違ちがう、だから言った。

「もどりたくない。」

戻ったってどうせまたばかりにする人がいる。それに僕は一人、影どい

う暗い場所にいる。そんな中僕に手を差し伸べてくれる人なんか日なたにいる訳ない。そんな僕の心を知らないのか、先生は不思議な表情でまた尋ねてきた。

「どうして？」

うっとうしかった。僕の気持ちを分からない先生のこと。そう思ったとたんふと気づくともう夕方になっていた。はやく逃げ出したい、ぼくはそんな思いでだまった。

「…」

夕方になると、太陽が低くなり、木のかげは大人でも入れるようなスペースができていた。

先生はだまっているぼくにしびれをきらしたのか、えものをねらう鳥のように目をつり上げて僕を見た。先生はもうしゃべりたくない

かのように一言、

「だまっていたらわからないじゃないか。さあ、立って。早く。」

そう言っ、もう僕には興味が無くなったようにスマホをいじり始めた。

僕が居る影にも入ってくれない、そう思ったとき、公園の前の電柱

でうろついていたカラスが急に飛び立った。何があったのだろう。そう思いそれを見上げると、上空ではタカが、一羽のカラスをつかまえようとしていた。そのえものを追う目は僕を見た先生と同じ顔のように見えた。

それを見たとたん、僕は先生にとっても恐怖を感じた。僕もあの一羽のカラスのようにつかまえられてしまうんだ。逃げないと、そう思った僕は住んでいる家に一目散にかけ出した。

